

Title

余白の周縁——Reborn-Art Festival

Name

伊藤亜紗

余白とは、特定の目的を持たない空間である。だからこそ余白は、予期せぬ出会いの可能性に開かれている。そしてこの創造性ゆえに、利他の土壌になりうる。

しかし、余白がその創造性を発揮するまでに、長い時間がかかる場合もある。特にその余白が、そこに関わる人によって見出されたのではなく、強引に目的を奪われるような形で成立した場合には、図を作った結果として余白が生まれたのではなく、図が破壊されたことによってそこが余白になってしまった場合には。

2011年に起こった東日本大震災の際の大津波は、各地にそのような破壊的余白を生み出した。家も学校も病院も、人々の暮らしはまるごと押し流され、あとには瓦礫の山と広大な更地が残った。うめられ、再び目的を取り戻した更地もあれば、まだ余白のままに留まり続けている更地もある。余白に留まり続けている場所の多くは、端的に言って、関わる人々の合意形成がうまくいっていない地域だ。余白がありさえすればおのずと利他が生まれるわけではないことを思い知らされる。

宮城県の石巻南浜地区は、地震、津波、火災、地盤沈下という甚大かつ複合的な被害を受け、500名以上の人の命が犠牲となった地域である。近くの日和山にのぼると、鹿島御子神社の境内から、眼下に一角を見下ろすことができる（写真1）。左手には旧北上川、右手には日本製紙の工場、そのあいだに海に面した40ヘクタール弱の余白が残された。

新聞の報道を遡ると、この土地の復興計画の策定に関しては、早い時期から困難が認識されていたことが分かる。たとえば震災から約5ヶ月後の2011年6月11日の『朝日新聞』には、すでに「割れる意見 焦りも」という見出しが見られる。石巻市が提示した構想案に対して、住宅地を設けるか否かなどをめぐって、町内会長らからさまざまな注文がついたのだ。阪神淡路大震災では、自治体が一方的に復興計画を定めて反発にあった。この教訓を生かして、石巻市は住民らに開かれた意思決定を目指した。しかし、いざ意見交換会を開けば、意見の違いが表面化し、「市長が『ここだ』と言った方が早い」とさじを投げるような発言もあったという。



写真1

津波火災にあった旧門脇小の保存についても意見が割れた。震災のシンボルとして残すべきだとする立場、生活空間で毎日目に入るのはつらいという立場、さらには現実的な問題として、一部保存でも初期整備費に2億9千万から7億円という莫大な費用がかかるという問題もある。まだ148名が行方不明であることを考えれば、土地に手を加えること自体に抵抗を感じる遺族もいるだろう。余白は、それが余白であるがゆえに、人のさまざまな思いが投影される対象となる。そしてそれゆえに、異なる立場のぶつかり合いを顕在化してしまいうる。

2021年6月6日、10年にわたる議論を経て、この地に石巻南浜復興祈念公園がオープンした。震災前の街の主要な街路が公園の幹線道路として残されたほか、みやぎ東日本大震災津波伝承館も開館した。南浜地区の市街地化以前の土地の記憶、震災前の街の記憶、震災後の追悼と伝承の祈念という3つの場所性を重ねていくことを基本デザインコンセプトにしているという。

ただし、公園のオープンはまだまだゴールではないように思われる。公園には国、宮城県、石巻市という三つの運営主体が入っているが、立場の違いを超えて一体的に管理できているのかは疑問が残る。たとえば、国が管理するみやぎ東日本大震災津波伝承館の展示内容をめぐって、地元の住民から「原発事故の教訓が分からない」「避難生活の厳しさが伝わらない」といった批判が寄せられているという（『朝日新聞』2021年5月24日）。

こうした状況のなか、Reborn-Art Festivalの3回目の本祭が開催された（前期2021年8月11日～9月2日、後期2022年8月20日～10月2日）。テーマは「利他と流動性」。私はこのうち後期終了間際、2022年10月1日に現地をおとずれることができた。

Reborn-Art Festivalでは現代アートを中心とした作品があちこちに展示されている。展示場所は石巻の各地にわたるが、中でも石巻南浜復興祈念公園周辺エリアは、今回の会期の目玉地域として、9名の作家による作品が展示されていた。



写真 2-1



写真 2-2

たとえば、保良雄（やすら・たけし）の《This ground is still alive》（写真2-1、2-2）では、更地となった土地の一角を耕し、植物がびっしり生える小さな農園をつくった。中に入ると植物たちのいい匂いが立ち込める。過剰に視界の開けた周囲の更地とは対照的に、視界が遮られるこの空間こそ、実は本当の余白ではないかという気がしてくる。陰に隠れることができる余白本来の安心感がここにはある。

SIDE COREの《タワリング・バカンシー》（写真3-1、3-2）も、私たちが物陰に隠してくれる作品だ。そもそも展示場所に選ばれているのは、作品がなければ行くことがないような、防潮堤の何もない隅っこである。仮設的に囲われた工事現場のような空間の中には、さまざまな形をした立体物が転がり、東京から石巻に来るまでのあいだに録音されたという音が混ざりながら聞こえてくる。響き渡るノイズに、足音も会話もかき消されてよく聞



写真 3-1



写真 3-2

こえない。作品の名前のとおり、空虚を立ち上げている。

興味深いのは、このエリアに展示された作品のすべてが、石巻南浜復興祈念公園の周縁に、つまり公園の敷地内ではなく外に、展示されていることだ。公園の敷地内に展示できなかったのは、このエリアで現代アートの作品展示を行うことに対して、合意に至ることが難しかったせいなのだろう。余白の周縁。まさに公園という余白に対するはかない額縁のように、作品が点在している。

けれども、この余白の周縁という位置こそ、「利他と流動性」というテーマにはふさわしいのではないかとも思う。日和山からすべてが見えてしまうという物理的な意味においても、さまざまな意見の対立を可視化してしまうという政治的な意味においても、過剰に可視的なこの広大な余白において、人は創造的になることは難しい。安心して他者と出会い、ひそやかな化学反応を起こすためには、身を隠す必要がある。

Reborn-Art Festival 実行委員長の小林武史は「利他的なセンス」を、「持てる者が持てない者に物質的な施しを与えるということには留まらない、慈善活動のような思いには留まらない、共に生きるという視点」と定義する¹。そして「共に生きる」とは「自己と他者の境界を流動性で捉えていくというイメージ」である、と。

境界線が明確に見える場所では、自己と他者の関係は流動化しにくい。周縁にしつらえられた作品たちは、公園の遊具のように、隠れることのできる物陰を、自分を見失うような目眩の経験を、訪れる者に提供しているように見える。一般的には目を引くアイコンとして機能することの多いアートが、ここでは、暗がりを作り出している。そして、この暗がりが利他の土壌となる。その養分が少しずつ公園に広がっていくことを夢見て。

¹ Reborn-Art Festival 公式サイト、メッセージ「困難さの向こうにある新たな広がりのために」、<https://www.reborn-art-fes.jp/message/>（2022年11月29日最終閲覧）